第３種郵便物認可

きょういくリポート

討論や社会体験 重視

府内の教員研修 様変わり

授業のない夏休みを中心に行われる京都府内の教員研修が最近、変わりつつある。増やし続けてきた講座数を見直したり、講義形式に代わって参加者同士の討論形式を重視するようになっている。背景には、教員の多忙感の高まりや授業スタイル自体の変化があるようだ。（梶井進）

授業スタイル変化に対応

8月2～5日、採用1年目の京都市立中の教員を対象にした初任者研修が下京区の下京中であった。約70人の参加者がグループに分かれ、順番に自分の授業プランを見せて批評し合い、生徒を注目させたり、質問させたりするこつを学んだ。講義はわずかだった。

一方的な「詰め込み学習」に対する反省から、子どもたちに討論を促し、解答を導き出させる力が今の教員には求められる。研修に参加した烏丸中の柴田雅史教諭(22)は「それぞれの意見を書いた付せんを模造紙に張って話し合った研修の手法は、学校の授業にも生かせる」と、グループ活動重視の研修に手応えを感じていた。

また、社会とのつながりを児童・生徒にリアルに教えるために、ハイテク企業を見学したり、商店街の店頭に立って接客を体験する研修も増えている。

年間を通じて開かれる講座の数にも変化がみられる。京都市教育委員会は、ピーク時の2008年度に年間232講座あった校外研修を減らし、10年度は218講座にした。教頭や主任といった職務に応じた必修講座を少なくし、それぞれの課題に合わせて必要な講座を選択しやすくした。

文部科学省の06年の全国調査で、公立小中学校教員の7割以上が「授業の準備時間が足りない」と答えた。事務作業や保護者対応に追われて多忙感が増しているためで、府教委も08年度以降、研修会場に教員を集める講座を減らしている。

多忙、講座数絞り込み

一方で、府教委は学校に講師を派遣する「出前」方式の研修を導入し、年間約200講座を開いている。研修を担当する府総合教育センターは「（出前方式は）教員の移動の負担を軽減でき、子どもと向き合う時間を確保できる。今後も効果的な研修を提供したい」としている。

グループに分かれて自分たちの授業プランについて意見を出し合う採用1年目の教員たち（京都市下京区・下京中）

Education